

アウグスティヌス：教職への召命

——『書簡』21を中心として——

村 川 満

アウグスティヌスの生涯の中で、一般に最もよく知られ、多くの学問的研究の対象となってきたのは、いうまでもなく、いわゆる「回心」の事件である。彼がキリスト教世界に及ぼした比類のない影響を考えると、そのキリスト者としての出発点をなす回心の意義はまことに大きく、人々の関心がここに集中するのも当然のことと思われる。しかしながら、アウグスティヌスは、回心によってキリスト者になっただけではなく、約五年後に教会の教職となり、その後の四十年にわたる巨人的活動は、もっぱらこの公的教会人としての立場からなされたものである。

そのことを考えると、その出発点にある教職就任の出来事は、回心と並ぶかあるいはそれに次ぐ重大な意義をもつと言わなければならない。にもかかわらず、これまでそれにふさわしい関心が示されてきたとは言い難い。そこで、まず手始めとして、最も基本的な資料であるポシディウスの『アウグスティヌス伝』、アウグスティヌスの『説教』355、『書簡』21等にもとづいて、出来事の詳細を明らかにし、さらにその時のアウグスティヌスの内面状況、さらにはその召命感といったものをさぐってみたい。『書簡』21も『説教』355も、まだ邦訳されていないと思われるので、前者は全部を訳して本文中に入れ、後者は関係する部分を訳して、付録の形で最後に加えることとする。

—

アウグスティヌスは回心より二年経った388年秋、ようやくかねてより計画していた故郷アフリ

カへの帰還を果たした。五年ぶりの帰国であったが、彼は出立した時とは、いわばすっかり別人となって帰って来たのである。出立の時は、信奉していたマニ教への疑いに不安な精神状態であり、また悲しむ母モニカを振り切ってではあったが、前途洋々たる修辞学の教師として、野心に満たされ、繁栄の首都ローマへのあこがれを胸に秘めて、故郷を後にしたのであった。が今は、修辞学の教授の職も、世間的栄達も、富も結婚もすべて捨て、ただ親しい同志との共同生活によって、ひたすら神に仕えることを念願して、帰って来たのである。カルタゴを経て、故郷の町タガステに到着くと、父の遺産を処分し、その金で親しい仲間とともに修道院の共同生活を始める。それは、回心直後にミラノ郊外のカッシキアクム（Cassiciacum）の山荘でなされた哲学的共同生活の延長という面をもっていたが、決して同じものとは言えなかった¹⁾。周囲の状況も、彼の内面的状況も大きく変わっていた。カッシキアクムでは、世間から離れた静かな山荘で、来るべき受洗にそなえて、ただ親しい同志との共同生活の中で、瞑想と祈り、聖書と古典の学び、哲学的討論などに打ち込む生活であったが、ここでは、依然として、古代世界の哲学的生活の理想は失われてはいなかったが、もはや、知的エリートの世俗を離れた哲学的共同生活が目指されたのではなく、カトリック教会という大きな組織化された社会の中に身をおき、積極的に、信徒達の間で、神に仕える活動をしようとしているのである。そしてこの決意は、恐らく受洗後ミラノに滞在していた時にさかのぼることができるであろう²⁾。その意味では、

1) v. Peter Brown, *Augustine of Hippo: A Biography*, London, Faber & Faber, 1967, p 132.

2) v. *Conf.*, IX, 17.

ポシディウスがアウグスティヌスの受洗についての記述のあとに、次のように書いているのは不当ではなく、同時にそれは内容的にはタガステの生活によく当てはまるものと考えられる。

ほどなく、彼はこの世でいだいていたすべての望みを、心底から捨て去った。もはや、妻も、肉の子も、富も、この世の榮譽も求めず、ただ神の民とともに神に仕えようと決心した。彼の願いはただ、主が呼びかけて、「恐れるな、小さい群れよ。み国を下さることは、あなたがたの父のみこころなのである。自分の持ち物を売って、施しをきなさい。自分のために古びることのない財布をつくり、天に尽きることのない宝をたくわえなさい」(ルカ12, 32) 云々と言われたその「小さい群れ」の中にあり、その一員となることであった。そして主がふたたび言われたこと、「もしあなたが完全になりたいと思うなら、あなたの持ち物をすべて売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして来て、わたしに従いなさい」(マタイ19:21)を、この聖なる人は実行したいと思ったのである³⁾。

二

このようなタガステにおけるアウグスティヌスの約二年間の活動の詳細とその間の彼の内面的状況の変化・発展等の問題は、興味深い事柄ではあるが、今は扱うことができない。しかしともかく、アウグスティヌスの活動は孤立したものではなく、異教徒やマニ教徒やドナティストなどの敵対的諸勢力と闘いつつあるアフリカのカトリック教会社会の中に根を下ろしたものであった。したがって、彼はその主宰する共同体の祈りと冥想と聖書の学びに励む敬虔さによって、人々の注目を集めただけでなく、直面する様々な問題について助言や援助を求めてくる人々に、直接あるいは手紙によって指導を与えることを通して、ますます深

く教会の生の中にはいり込んでゆくことになった。さらにこの時期に、マニ教を論駁する意図をもった『マニ教徒に対する創世記論』(*De Genesi contra Manichaeos*)と『真の宗教』(*De vera religione*)を著すが、マニ教は、彼が九年間もそのとりこになり、友人達をもそれに導き入れた宗教であったから、これを論駁してキリスト教の立場を弁証することは、彼自身の信仰の確立の問題であるとともに、どうしても果たさなければならない責任・義務と感じられたのである。しかしそれは、マニ教とカトリック教会との対立がとりわけ鋭いアフリカにおいては、非常に大きい教会的意義を担わざるを得なかった。彼自身もそのことを十分自覚して、教会の対マニ教の闘いに積極的に参加しているのである⁴⁾。このような活動によって、彼は広く名を知られるようになり、キリスト教の指導的人物のひとりとみなされるようになるのは避けられないことであった。しかし、これは決して彼の望むところではなく、とくに、このようにして教会の指導者に担ぎ出されるようになることは、彼の心ひそかに恐れるところであった。というのは、当時会衆が自分たちの司教を選ぶ習慣があり、それも、時には本人の意向とは無関係に、誰かをむりやりに司教に選んでしまうこともあるほどで、彼の霊的父であるアンブロシウス(Ambrosius)も、そのようにして、まだ洗礼も受けていなかった時に、司教に選ばれたということを経験していたからである。そこで、彼は大いに警戒して、司教の座が空席になっている町へは決して行かないようにしていたというほどであった⁵⁾。

三

ところが、391年のはじめ、タガステの町の北約95キロにある、地中海に面した町、北アフリカでカルタゴに次ぐ大きな都市ヒッポ(Hippo)へ彼は出掛けていった。その間の事情については、ポシディウスが次のように書いている。

3) Possidius, *Vita Augustini*, III, Migne, *Patrologia Latina*, 32. 所収のテキストを用いる。新しい校訂本は利用できなかった。

4) v. Brown, *Augustine*, p. 134.

5) Possidius, *Vita*, IV; Augustinus, *Sermo* 355, 2 (付録を参照)。

同じ頃の出来事であるが、ヒッポ・レギウスに駐在している、いわゆる「行政監察官」⁶⁾のひとりで、神を恐れる立派なキリスト信者が、アウグスティヌスの名声と教えとを伝え聞き、ぜひ彼に会いたいと切望し、いつかその口から神の言葉を聞く恵みにあずかるならば、この世の欲望と誘惑をすっかり軽蔑することができるだろうと断言していた。この話が、信頼できる筋からもたらされた時、アウグスティヌスは、この世のもろもろの危険と永遠の死とからこのたましいを救い出したいと願って、進んで、すぐに、前述の町へやって来た。そしてその人と会って、何度も話をし、神から与えられた力の及ぶ限り、彼に神に誓ったことを果たすようにすすめた⁷⁾。

この直接の目的のほかに、ヒッポへ来たことと関連して、修道院を建てる場所をさがしていたということをアウグスティヌスは語っている⁸⁾。

さて、彼が恐れ警戒していた点については、当時この町にはワレリウス (Valerius) という司教がいたので、安心していただけと彼は語っている⁹⁾。ところが、この司教はギリシア生まれで、ラテン語を流暢に話すことが出来なかったので、み言葉の説教のつとめが十分果たせないことを苦にしていた。それで、この点で自分を助けてくれる人が与えられるようにと、繰り返して神に祈りを捧げていたのである¹⁰⁾。そんなこととは知らないアウグスティヌスは、教会の集会に出席して、「人々の中に安心して立っていた」¹¹⁾。ところが、その集会の間に司教は、自分を助けてくれる司祭を教会が如何に必要としているかを語り、適当な人を見つけてくれるようにと促した。その時会衆の中の誰かが、人々の間に隠れて立っているアウグスティヌスを認めて、彼をその地位に最適だとして

推薦した。会衆は熱狂的にそれに同意して、彼を直ちに司祭に任職するように求めた。その時の状況をポシディウスは次のように書いている。

そこで彼らは彼をしっかりとつかまえて、そのような場合の習慣どおり、任職のために司教のもとに連れて行った。そしてみんな心から一致して、これを今その場で行うように求めて、大きな叫び声をあげ熱烈に要求したが、アウグスティヌスは、涙をいっぱい流して泣いていた。その時、彼自身が後にわれわれに語ったように、人々の中には、彼の涙を傲慢な仕方で解釈して、いわば彼を慰めるつもりで、あなたはたしかに司祭職よりも上の地位にふさわしい人であるが、それでも司祭職につくことは司教職に近づくことになる、と言ったものもあった。しかしこの神の人は、後にわれわれに語ったように、もっと高い規準で事柄を理解して嘆いていたのである。つまり、彼は教会を支配し統治する職につくことから、どんなに多くの大きい危険が自分の身にすぐにもふりかかってくるかを予見して、それ故に泣いていたのである¹²⁾。

四

この描写のなかで、著しい対照をなしているのは、任職を求めて叫ぶ会衆の熱狂と、そのことを激しく泣いて悲しむアウグスティヌスの姿であった。人々の歓呼の中で何故彼はそれほど悲しまなければならなかったのであろうか。ポシディウスはその原因を、彼が教職者の仕事のもたらす危険を予見したこととしている。しかしそれだけでは十分の説明になっていないように思われる。というのは、危険の予測は、時にはかえって勇気を鼓舞することもあり、そうでなくても、不安や恐れを呼び起こすのが普通であって、悲しみとすぐに

6) *agentes in rebus* 適当な訳語がないので山田晶訳『告白』pp. 270-71の訳語を借りる。皇帝に直属して、書簡の伝達、税金の徴収、地方行政の監察など種々の仕事に携ったが、真の仕事は秘密警察のそれであった。

7) *Possidius, Vita*, III.

8) *Sermo* 355, 2. (付録).

9) *ibid.*

10) *Possidius, Vita*, V.

11) *ibid.*, IV.

12) *ibid.*

は結びつかない。悲しみは、むしろ自分の大切にしているものが奪われたり、自分の願望や計画が挫折したりした時に味わわれるもので、もちろんその上に、さらに、自分に担いきれないような重荷が課せられる時、それは倍加する。アウグスティヌスが味わった悲しみは、まさしくそのような性質のものであった。まず、教職への道は彼が自ら選んだものではなかった。カトリック教会の中で、すでに目立った活動を始めていたとはいえ、彼の願いは、あくまでも一信徒として働くことで、彼には教職になる考えは全くなかった。にもかかわらず彼の意に反して、いわばむりやりに¹³⁾、しかも突然に教職に任命されるということが起こったのである。これが彼の悲しみの原因の第一点だと考えられる。次に、彼は何を奪われ、どんな願望や計画が打ち砕かれたのであろうか。それが、世俗的生活や富や名誉の追求というようなものでなかったことは明らかである。彼はそれらとは回心とともにきっぱり手を切っていたのである。彼が断念しなければならなかったのは、回心を出発点として、とくにタガステで始めていた新しい生活——必ずしも世俗を離れた静寂な哲学的生活ではなかったが、あくまでも冥想と祈りと学びを中心とした共同生活で、ひとびとの相談に乗ることもしながら、著作活動にも励むことができるような生活——であった。しかもこれは単に彼の嗜好の選択ではなく、信仰にもとづき、敬虔な思いで、自分に最も適した、神に仕える道だと確信して、それにいわばすべてを賭けて歩み出していた道であった。しかるに、その敬虔な願いさえも否定され、望まないつとめに、むりやりにつかされようとしている。これが彼の悲しみの原因の第二点である。第三としては、自分に押しつけられた教職のつとめが、自分に適しているとも、自分に耐えられるとも思われなかったことである。当時の教職のつとめは、霊的な事柄だけではなく、教会の内外の無数の世俗的問題の処理に直接携わらなければならないもので、それは世俗の権力機関とのかわりも当然生じてきて、アウグスティヌスのような哲学的、思索的、内面的な人格にはとても担い切れるものとは思われなかったのである。こ

のように、彼のその時のひどい悲しみの原因には、以上のような三つの面があったと考えられるが、彼が最晩年の説教で¹⁴⁾、当時のことをふりかえて述べているところを読むと、彼の悲しみには、さらに深い内面的理由があったように思われる。

そこで彼は、司教としての現在の自分は求めたものではなく、反対に、自分としては司教にされることを非常に恐れ、警戒していたことを述べ、その理由あるいはその時の気持をくわしく語っている。その訳文は、この論文の最後に付録の形で載せるので、ここではその言葉通りではなく、彼の言わんとしているところを、敷衍して説明してみることにしよう。まず、彼が回心によってこの世を捨てたいということは、単に結婚や職業をすてたということではなく、世俗的生き方そのものの、欲望の充足を求め、富や地位や榮譽を追求する生き方そのものを、徹底的に否定することであった。したがって、彼が歩み出していた新しい道は、本質的には、その外面的形態にあるのではなく、むしろ、地位や榮譽を求めず、己れをひくくしてひたすら神に仕える、その徹底的献身の生き方にあった。それ故、たとえ教会においてであっても、司教のような名誉ある高い地位、人々を支配する地位につくことは、彼には、敬虔な思いで、ようやく始めていたその新しい生き方を否定するものと感じられたのである。彼の悲しみの大きかった深い理由はここにある。さらに、将来ふりかかってくる危険の予測ということについても、それはそのつとめに伴ういわば外的困難さだけではなく、むしろ高い地位に伴う霊的危険、つまり高い地位である故のそれだけ大きい責任と陥りやすい誘惑とのもたらす危険のことを言っているのである。

このように見てくると、アウグスティヌスが流した涙にはいろいろの要因が複雑にからみ合っていたことがわかるが、そのことを頭におきつつ、その涙の理由について要約的に言うならば、彼にあっては、教職につくことはもともと全く望まぬところであり、それどころか、彼が敬虔な思いで、神に仕える最適の道と確信して始めていた生き方

13) Ep. 21, 1. 'Vis mihi facta est' (暴力がわたしに加えられた)。

14) Sermo 355.

を、それは外的にも内的にも否定するものとして現われた。しかもそれに伴ってやってくると予想される外的・内的危険は、とても自分に対処できるものとは思えなかった。にもかかわらず、今それが、意に反して強制的に、しかも何の用意もなしに突然、押しつけられようとしている。彼はこれを、自分の罪に対する神の刑罰だとしか考えられなかった¹⁵⁾。ここに彼のひどい悲しみの理由はあった。

五

さて、このようにアウグスティヌスの悲しみは大きかったが、一致して大声で叫ぶ会衆の熱狂的な意志表明と、それを、自分の祈りを予期しない仕方で聞き届けて下さった神の摂理的はからいと見る老ワレリウス司教の判断¹⁶⁾を前にしては、彼の涙も全く無駄であった。そして彼自身も、そこに神の御意志のあることを認めないわけにはいかなかった。そこで、それを主の召命と受けとめ、「しもべは主人に言い逆らうべきではない」¹⁷⁾と考へて、教職への道には行っていったのである。悲しみから一転して、決然として新しい道へは行って行ったその時の彼の心境、また真剣な決意を、われわれにうかがい知らせるものとして、ワレリウス司教宛の書簡が残されている（『書簡』21）。これは何の準備もなしに、突然、むりやりに司祭にされてしまったアウグスティヌスが、その職についてみてなお一層自分の不備を痛感し、司教に、準備のため、祈りと聖書研究に専念できるように、暫くの自由な時間を与えて下さいと懇願する内容のものである。この願いは、すでに人を通じて口頭で伝えてあったものであるが、司教から返事がなかったのか、あるいは満足な返事が得られなかったために、あらためて、申し出たものである¹⁸⁾。これは教職というものの本質とその重大さを深く捉え、信仰と真情にあふれた、しかも修辞学の教師としての素養が発揮されていて、説得力に富ん

だ、感動的な書簡である。それで、以下これを一節ずつ順を追って訳出紹介しながら、それにいくらかのコメントを加えて、アウグスティヌスの召命の自覚の一端にふれたいと思う¹⁹⁾。

六

『書簡』21,

(1) 何よりもまずお願いいたしたいことは、司教様の信仰あつい御賢慮を、この際ぜひともいただきたいということであります。と申しますのは、司教や司祭や助祭の職務は、もしお座なりでしかも迎合的な仕方で行われます場合には、この世で、またとくに今の時代に、これほど安易で、楽しく、人々の気に入られるものはありませんが、神の御目から見ると、これほど悲惨で、嘆かわしく、忌むべきものもありません。反対に、司教や司祭や助祭の職務ほど、この世で、またとくに今の時代に、困難で、苦勞が多く、危険に満ちたものではありませんが、われらの司令官の御命令のままに務めますならば、神の御目から見て、これほど祝福に満ちたものもありません。ところが、わたしは、その務めをどんな風にすればいいのかにつきましては、少年時代からはもちろん、青年時代からも、全然学んでいないのです。それを学び始めたらようどその時に、自分の罪の報いとして——そうとしか考えようがありませんが——わたしはオールの握り方もまだ知りませんのに、むりやりに、舵取りの第二の地位を任せられたのです。

ここでアウグスティヌスは、教職というものを自分の野心や欲望を満足させる道と考える世俗的考えを否定するとともに、それをただ労苦と危険に満ちたものとしてしか考えないペシミスティックな教職観をも排し、それが祝福にあふれたすばらしい職であることを、はっきり断言している。先には教職に就くことを涙をもって悲しんだ彼で

15) Ep. 21, 1.

16) Possidius, Vita, V.

17) Sermo 355, 2 (付録).

18) v. Ep. 21, 4; M. Pellegrino, *The True Priest*, N. Y., Philosophical Library, Eng. tr., p. 28.

19) テキストとしては J. H. Baxter(ed.), *St. Augustine, Select Letters* (Loeb Classical Library)1930, pp. 33-40 のラテン語本文 (C S E L の Goldbacher 校訂のテキストが収録されている) を用いた。

はあったが、今や、はっきりとした自覚の上に立って、教職への道を歩み出そうとしていることがうかがわれる。ただ彼にとって問題なのは、教職としての基礎的訓練のないことである。もちろん、これまでも、教職のつとめについて全く知識がなかったわけではなく、聖書の勉強もしていた。けれども、実際に教職の召命を受けてはじめて、この職の重さを身をもって味わい、自分の足りなさを痛感したのである。

七

(2) しかしながら、これも主がわたしの罪を懲らしめようとなさったのだと思います。と申しますのは、わたしは、自分が経験してその仕事が多様なものであるかを知るまでは、厚くましくも多くの船乗りたち²⁰⁾の罪を非難してまいりました。まるで自分の方が経験も能力も上であるかのようにです。そこで、わたしは彼らの真中に送り込まれましたとき、はじめて、自分のしてきた非難の軽率さを知るようになりました。もっとも、それ以前にも、この務めが危険に満ちたものだとは考えておりましたが。そして、わたしがこの職につけられました最初の時に、涙を流しましたわけはそこにあったのです。兄弟たちの中にはそれに気付いた方もあって、わたしの悲しみの原因がわからないまま、できる限りの言葉で、わたしを慰めようとされましたが、その言葉はまるでわたしの傷には届きませんでした。善意からして下さったことにちがいないのですが。しかしながら、わたしは実際にこの務めについてみて、前に考えていたよりもずっとずっとはっきりと[その危険さが]わかったのです。と申しまして、これまで見たことも、聞いたことも、読んだことも、考えたこともないような、何か新しい波や嵐を、わたしが見たというわけではありません。わたしが申しますのは、そういう波や嵐を避けたり、それに立ち向かったりする、自分の技量と力とを全く知らずに、それが何か大したものであるよ

うに思っていたということです。しかし、主はわたしをお笑いになり、わたしがどんなものであるかを、じっさいの経験によって、わたしに示そうとなさったのです。

前節で「罪の報い」と言ったその罪を、ここで、教職者たちの罪を非難してきた罪として、特定している。そしてそれは、いわば局外者が実地に経験しない非難をする「軽率さ」(temeritas)の罪であると言っているが、同時に、それが根本的には、自分の弱さや無力さを自覚しないで思い上げる傲慢の罪にほかならないことを指摘している。このように、特定の罪をそれだけにとどめず、最も根源的な傲慢(superbia)の罪にまでさかのぼって考えるのは、アウグスティヌスに特徴的なことである。

またここで、司祭にあげられた時に流した涙の理由にふれているが、それは、教職者たちを非難してきたことの軽率さを恥じて泣いたというのではなく²¹⁾、自分が外から非難していた当の教職者たちの中にほうり込まれて、あらためてこの務めの困難さと自分の無力とを身にしみて感じさせられ、そこに自分の罪とそれに対する裁きとを悟って泣いたというのであろう。

八

(3) 神がこうなされたのは、わたしを罪に定めようとしてではなく、わたしをあわれんで下さったのであるといたしますならば——今は自分の弱さを悟っておりますので、確信をもってそう考えておりますが——わたしのなすべきことは、神の与えて下さった聖書の中にあるすべての治療法を隈なく捜して、祈りと学びによって²²⁾、これほど危険に満ちた仕事に当たることのできる力が、自分のたましいに与えられるように努めることだと思います。このことをわたしは前にはやっております。時間もありませんでしたから。と申しますのは、わたしが任職されましたのは、仲間の者といっしょに、聖

20) 教職者たちのこと。

21) v. Brown, *Augustine*, p. 139.

22) orando ac legendo.

書に親しむために自由な時間を持とうと考え、この仕事に必要な暇を確保しようと計画しておりましたちょうどその時だったからです。実際、その時わたしは、今わたしを苦しめ悩ましているこの仕事に、自分がどのように欠けているかということ、まだ知りませんでした。今わたしは、神の秘跡(礼典)とみ言葉とを民に頒つ人に必要なのはどんなものであるかということ〔しかも自分にそれが欠けていること〕を、経験によって教えられました。にもかかわらず、その自分が持っていないとわかっているものを、獲得することがわたしに許されないといえますならば、ワレリウス司教様、あなたはわたしに滅びよとお命じになるのですか。あなたの愛はどこにあるのですか。あなたがわたしを愛して下さっているのは確かでしょうか。あなたがわたしをこんな状態のままで、教会に仕えさせようとなさるのでしたら、あなたは本当に教会を愛していられるのでしょうか。もちろん、あなたがわたしも教会もどちらも愛していられることは、はっきりわかっています。ただあなたは、わたしにじゅうぶん力があるとお考えになって〔そうしようとなさって〕いるのです。しかし、自分のことはわたしの方がよくわかっていますが、そのわたしでも、実際に経験して悟らなければ、自分のことがわからなかったでしょう。

アウグスティヌスは、教職としての自分の力不足と、傲慢の罪に対する神の罰を覚えながらも、決して絶望に陥るのではなく、かえってそれ故にこそ、あわれみの神に信頼して、その召しにこたえ、それにふさわしい者となるために、全力をあげて準備をしようとするのである。

ここで、その準備に必須なものとして、祈りと聖書の学びとがあげられている。もちろん、これまでもこの二つはなされてきたことであり、とくにタガステの共同生活では、これらは活動の中心におかれていたはずである。しかし、彼にはそれは十分なものとは考えられず、任職前に、何かそれとは異なった、より本格的な聖書研究の必要を

感じて、その実現のために具体的な計画を立てていたように見える。それは、前にも言及したように、『説教』355で、ヒッポへやって来た一つの理由として、「修道院をたてる場所をさがしていた」と述べていることと恐らく関連があるだろう²³⁾。しかるに、その計画が実現しないうちに、突然、任職をうけたのであるから、彼が聖書の学びができていないと考えるのはもっともなことであろう。しかも、ここで、信徒として考えていたことと、実際に教職について悟ったこととの間に大きいギャップのあることを語っているから、なおさらである。

しかしながら、彼のこのような自覚は、ワレリウス司教にはわからないことで、司教としては、彼を教職に十分適格だと判断して、すぐに教会の職務、とくに自分が最も助けを必要としている、み言葉を頒つ仕事に当たらせたいと思っていたのであろう。この司教の判断は、客観的に見れば、決して不当なものとは考えられない。というのは、アウグスティヌスの活動はすでに人々に知られており、とくにキリスト教著作家としての働きは目覚ましいものがあった、最近著した『真の宗教』では、すでに成熟したキリスト教理解を示しているほどであったから、その彼に会衆を教える資格がないとは、ワレリウスならずとも、とても考えられないことであったろう。しかしながら、外からどう見えようとも、彼が自分をまだ不適格だとする考えは心底からのものであった。これは、彼が自己を過小評価したというようなことではなく、教職のつとめの重大さを、余人の考え及ばぬほど深刻にうけとめ、それを担ってゆくにあたっての自分の知識、信仰その他あらゆる点での不十分さを、彼がどんなに痛切に感じていたかを示すものである。彼が必要と考えている聖書の学びというもの、単なる広い聖書知識というようなものではなく、何かもっと内面的なことであることは、ここで自分を病人になぞらえて、聖書のうちに治療法(薬)を求め、たましいに力を与えられるようにつとめると言っているところからよくわかる。それは、祈りと一体となった聖書の学びで、それがまだできていないから、教職のつとめを果たす

23) v. Brown, *Augustine*, p. 136.

に足るたましいの力がないというのが、アウグスティヌスの深刻な自覚であった。それだからこそ、このように、強い言葉でワレリウスに訴えているのである。

九

(4) しかし司教様、多分あなたはこうおっしゃるでしょう。「いったい君の教育に何が欠けているのかを知りたいね」と。しかし、わたしの欠け目は非常に多いものですから、自分が得たいと願っているものを数え上げるよりも、今もっているものを数え上げる方が容易なほどです。と申しますのは、わたしたちの救いにかかわるのは何であるかということについては、わたしはそれを知っており、十分確信しているとはっきり言うことができます。しかしながら、これを他の人々の救いに役立てるには、どのようにしたらいいのでしょうか。つまり、ただ「自分に何が役立つかを求めるのではなく、救われるために、多くの人々に何が役立つか」(Ⅰコリント10:33)を求める場合であります。〔それについては〕恐らく聖書の中に何か助言²⁴⁾がしるされているでしょう。いやしるされているに違いありません。それを知り、しっかりと把握いたしますならば、神の人²⁵⁾は、教会の務めをより秩序正しく行うことができるでしょうし、また邪悪な者たちの手中にあっても、健全な良心をもって生きることができ、また死ぬことになっても、ただキリスト者の謙虚で柔和なところだけがあこがれているあの生を失うことは、決してないでありましょう。しかしそれでは、どのようにすればこのことは可能になるのでしょうか。主ご自身が仰せになるように、求め、捜し、門をたたくこと、つまり、祈り、学び、胸を打つこと²⁶⁾以外に道はないではありませんか。そこで、このことを実行するために、少しばかりの時間——できれば復活節まで——をわたしに下さるように、あなたの真実この上

ない、尊い愛におすがりして、前には兄弟たちを通じてお願いいたしましたが、今またこうして直接お願いする次第です。

アウグスティヌスはここで、前節で述べた教職としての資格の無さということが、ワレリウスに理解されないことを自覚して、それを少し具体的な形で説明しようとしている。すなわち、キリスト信者が個人として自分の救いに必要な知識をもつことと、それを他の人々の救いのために用いる説教者また牧会者の仕事とははっきり区別して、自分に心得がないというのは後者のことだと言おうとしている。この区別に立てば、これまでのキリスト者としての目覚ましい働きも、なお前者に属することで、後者の教職としての準備の方はまだできていないということになる。そして前者の場合と同様に、ここにおいても、聖書が導き手であるという確信に立って出発しようとしているが、ここで聖書の中に見出される「助言」というのは、単に説教や牧会の方法論のことではなく、また教職として必要な広い十分な聖書知識でもなく、何かもっと内面的な事柄である。そのことは、前節で述べられていることからわかるが、ここでもそれが、邪悪な者たちの手中にあっても、健全な良心をもって、生きまた死ぬことができるようにする力を与えるものとされており、さらに、それを得る道として、「祈りと学び」に加えて「胸を打つこと」が言われているところから非常にはっきりしている。「胸を打つ」とは、はげしく泣くほどまでの悔い改めのことで、あの有名なミラノの庭園での回心の場面に見られるのが、まさしくその典型的なものである。そこで、彼はダビデの悔い改めの詩篇のことば(詩篇51:17)を引用しつつ次のように述べている。「わたしはとあるいちじくの木の下に身を投げ、涙の手綱を放しました。すると目から涙がどっとあふれ出しましたが、これはあなたに受け入れられるいけにえでした²⁷⁾」。またそれから44年を経過して、75歳で死の床に伏していた時、彼はダビデの悔い改めの詩

24) consilia

25) homo dei: 教職者のこと。

26) orando legendo plangendo.

27) Conf., VIII, 12, 28.

篇を書き写した紙片を壁に貼り、床の中でそれをじっと見つめ、それを読みながら絶えず涙をいっばい流していたということである²⁸⁾。このように、涙を流してはげしく泣きつつ悔い改めてキリスト者としての歩みを始め、また聖者と仰がれながら、同じくはげしい悔い改めの祈りでその生を終ったアウグスティヌスが、教職就任のような生涯の一大転機に、その準備として自らに同じはげしい悔い改めを課していることは、まことに自然なこととは言いながら、彼の行動がいつも深い宗教的内面性に貫かれていたことをよく示している。したがって、彼が教職に任じられて、それにふさわしくないことを痛感し、ふさわしいものになれるように準備のため暫くの猶予を願ったのは、単に不十分な聖書知識を補うために聖書研究の時間がほしいということではなく、もっと全人格的な準備のためであったことがわかる。あるいは、彼の考えている聖書研究は、そのような祈りと悔い改めと一つになったものであったと言ってもいいであろう。

十

(5) と申しますのは、わたしは、審判者なる主の前に出た時、どうお答えしたらいいのでしょうか。「教会の事に煩わされてしまったので、まだそういうものを手に入れることができないでいました」と言うのですか。そこで主がわたしにこう言われたらどうでしょう。「悪い僕よ、お前は、教会に大きな収穫をもたらす農場があって、それが誰か悪人の手に落ちようとした場合には、わたしが自分の血をそそいだ畑²⁹⁾の方はほうっておいて、そこでお前に何か有効な手が打てるのなら、地上の裁判官のところへ出かけてゆくのではないか。それには誰もが同意し、中にはお前に命令し、無理に行かせようとする者もあるかもしれない。そしてもし不利な判決が下された場合には、お前はさらに

〔皇帝の法廷に訴えようとして〕海を越えて出かけて行くのではないか。このようにしてお前の不在が一年かそれ以上になっても、誰も不平を鳴らす者はないだろう。だがそれは、貧しい人々の、たましいではなくて、肉体のために必要な土地が人手に渡らないためなのだ。しかし彼らの飢えは、わたしの生ける木々をよく手入れするなら、それらが満たしてくれるはずだ³⁰⁾。そしてその方が容易で、しかもわたしの気に入るやり方だ。それなのに、どうしてお前は、わたしの畑を耕す方法を学ぶ暇がなかったなどと言いつてるのか」〔こう主に問われたら〕わたしはどう答えたらいいのでしょうか、どうかお教え下さい³¹⁾。それとも、恐らくあなたは、わたしがこう言ったらいいとお考えなのでしょう。すなわち、「老ワレリウス様は、わたしがすべてのことをちゃんと知っているとお考えになっていて、しかも、わたしを愛していて下さったからこそ、なおさらわたしにそれらのことを学ぶ機会をお与えにならなかったのです」と。

アウグスティヌスはここで、ワレリウスを説得しようとして、修辞学の教師であった人らしく、その技巧をも駆使して、審判の座につかれた主の叱責の言葉という最も強い形で、自分の願いの正当性を主張しようとしているのである。ただ、修辞的書き方をしているので、その背景あるいは前提となっている状況がつかめないと、少しわかりにくいように思われる。まず、当時の教会が、単に靈的機関であるだけではなくて、下層民をその中にかかえた社会的救済機関でもあったこと、また司教は、靈的つとめだけではなく、とくに訴訟の仲裁をはじめとして、俗事に深く広くかわらなければならなかったことを知る必要がある。さらに、当時アフリカの教会は靈的に停滞し、教職者たちもその地位に甘んじて、靈的精進を怠り、教会内では典礼を行うことだけに満足し、教会外では俗事に大きくかわかり、人々もそれを怪しま

28) Possidius, *Vita*, XXXI.

29) 信者のたましいのこと。

30) 信者たちを靈的に正しく教育するならば、彼らは捧げ物によって、物質的な必要をも満たしてくれるはずだ、という意味だろう。v. Pellegrino, *The True Priest*, p. 33.

31) モーリスト版、ミーニュ版の punctuation に従う。

ず、むしろ当然のことと考え、それを期待していたという状況があった。こうした中でアウグスティヌスは、教職者のつとめが、何よりもみ言葉と秘跡(礼典)を人々に領つ霊的仕事であるということをはっきり見据えて、にもかかわらず教職者がそれをなおざりにして、物質的な教会の用務に専念してもなんら怪しまない一般の考えに、ここで痛撃を加えているのである。

十一

(6) これらのことをすべてよくお考え下さい、老ワレリウス様。キリストのいつくしみときびしさによって、キリストのあわれみとさばきによって、お願いいたします。キリストはあなたのうちに、わたしに対する大きい愛を吹き込まれましたので、わたしは、たとえ自分のたましいの益のためであっても、あなたのお気持を損なうことはとてもできません。ところがあなたは、ご自分がわたしに対してもっていらっしゃる純粋な心と愛と真実の情愛とについて、主キリストを証人となさっていますので、まるでわたし自身は、それらすべてについて何も誓うことができないほどです。そこでわたしは、あなたのその愛と情愛とに訴えてお願いいたします。どうかわたしをあわれんで、わたしをお願いしたことのために、お願いしただけの時間を、わたしにお与え下さい。同時に、わたしの願いが無駄にならず、またわたしの不在が、キリストの教会と兄弟たちや同労者たちの益とに役立つものとなりますように、祈りによってわたしをお助け下さい。あなたがわたしのために、とくにこうしたことで、お祈り下さるその愛を、主は決して軽んじたりなさらず、かぐわしいけにえとしてそれを受け入れ、恐らく、お願いしたよりも短い時間で、わたしに聖書からこの上なく有益な助言を学ばせた上で、〔あなたのもとへ〕わたしをお返しになるでしょう。

これでアウグスティヌスの書簡は終わっているが、彼がこれほど強い調子で、執拗なまでひたむ

きに懇願しなければならなかったのは、司教の側に、彼が十分その職に適格であるという判断があり、しかも猶予を求めている期間が、ちょうど教会暦でレントの全期間にわたるもので、その時期は、信者を復活節にむけてととのえ、洗礼志願者を受洗に備えて教育するために、み言葉のつとめが特別に強く必要とされる時であるから、その点で欠陥のあるワレリウスが、アウグスティヌスの助けを切望するのは当然で、彼の願いは簡単には聞き届けられないという事情があったためであろう³²⁾。それ故、最後に、願っている期間より短期間で務めに戻って来られるだろうという期待で書簡を結んでいるのは、復活節前の、彼が最も必要とされる時には間に合って帰ってくるという期待を司教にもたせて、彼にこのむずかしい要求を何とか聞き届けやすくしようとするものであろう。

さて、以上見てきたような、アウグスティヌスの、教職への選任のさいのひどい嘆きようや、職につくにあたってのひたむきな準備の要求は、常識的な人の眼には、いささかエクセントリックに見えることであろうが、それは、彼が教職への召命を如何に真剣にうけとめ、全身全霊をあげて、それにこたえていこうとしたかを示すものである。回心によって世俗的生き方をきっぱりと捨てた彼は、教職への召命によって、敬虔な思いで始めていた新しい生き方も、信仰にもとづいていた願望や計画もすべて捨てて、ひたすら教会と会衆に仕える新しい道へはいつて行ったのである。そこに見られる彼の徹底性には驚くべきものがある。著作活動について見ても、もともと哲学的資質に恵まれ、すでにその方面での著作をいくつも公にし、自由学芸の分野にも関心と才能をもち、その全体にわたって著作する計画を立て、すでに実行に移していた彼が、教職に就いてからは、膨大な著作を残しながら、教会に直接仕えることを目指した著作以外は一冊も書いていないのである。驚くべき自己否定、自己放棄と言わざるを得ない。また彼は聖書を全巻にわたってよく読み、勉強しているが、決して自分を聖書の学者だとは思っていない。あくまでも自分を牧会者として自覚し、託されている群れの教導に専念し、そ

32) v. Pellegrino, *The True Priest*, p. 32.

れに必要な限りの研究を心がけたのである³³⁾。もちろん、彼の活動の場は、単にヒッポの町にとどまっているわけにはいかなかったが、それも教会とのかしらであるキリストに仕えるため以外の何ものでもなかった。そしてその膨大な著作も、すべて異教や異端を論駁し、またキリスト信者の益をはかるということを目的とした、もっぱら教会とキリストに仕えるものであった³⁴⁾。このようにアウグスティヌスにとって、教職に召されるということは、教会への奉仕に召されることであり、それは何の限定も妥協も許されない徹底した奉仕の道であった。しかしそれに召された以上、彼はその召しに100パーセントこたえようとしたのであって、その徹底した態度は、召命の最初から死に至るまで、一貫して変わらなかったのである。

付 録

アウグスティヌス『説教』355より³⁵⁾

それでは長い話はしないようにしましょう。とくに、わたしは座って話をしていますが、あなたがたは、立ったままで苦勞しているわけですから。さて、わたしどもが司教の家と呼ばれている家でどんな暮しかたをしているかは、あなたがたの全部かあるいはほとんどの方が御存知の通りです。それは、「使徒行伝」で「だれひとりその持ち物を自分のものだと言主張する者がなく、いっさいの物を共有にしていた」(4:32)と言われているあの聖なる人々の生き方に、できるだけ倣おうとするものであります。でも恐らくあなたがたの中には、わたしどもの暮らし方について、こちらが知っていただきたいと思うほどにはそれを知らうとしていられない方もあると思います。ですから、それがどんなものかをお話ししましょう。もちろん、申しました通り、手短かにであります。

わたしは、御覧のとおり、恵み深い神のみこころによって、今あなたがたの司教となっておりますが、多くの方が御存知のように、この町には若

い時にやってまいりました。わたしは修道院を建てて、兄弟たちと共同生活をする場所を捜していたのであります。たしかにわたしは、この世に対する望みはすっかり捨てておりましたし、世間でひとかどの者になることができたかもしれませんが、そんな者になろうとも思っておりませんでした。しかしまた、現在の司教の地位もわたしが求めてなったものではありません。「わたしは罪人たちの天幕に住まうよりはむしろ、わが神の家で卑しい者であることを選びました」(詩篇83:11[84:10])。わたしは、この世を愛する人々から離れました。しかしそれは、[神の]民を支配する人々と並ぼうとしたものではありません。またわたしは主の食卓で、上席ではなくて、一番低い末席を選びました。それを主がそのみこころから、「もっと上席に進みなさい」と言われたのであります。

ところが、この司教の職はわたしのひどく恐れていたところで、わたしは、自分の評判が神のしもべたちのあいだで、何か高くなりかけておりましたので、司教がいないとわかっているところへは近づかないようにしていたのであります。わたしはこういう用心をして、できるかぎりつとめて、低い地位にあって救われるようにしておりました。それは高い地位に上って危険にさらされることにならないためであります。しかしながら、しもべは主人に言い逆らうべきではないのであります。

わたしがこの町にまいりましたのは、ある友人と会うためで、その人をわたしは神様のためにかちとって、修道院のわたしたちの仲間に加えることができると思っておりました。この町には司教がおられましたから、わたしは安全だと思っていました。じつはそうではなかったのですが。わたしはつかまえられて、司祭にされてしまいました。そしてこの司祭という段階を経て、今の司教の地位に到達したのであります。

33) v. e.g. *Ep.* 73, 5 (Hieronimus 宛).

34) v. e.g. *Ep.* 151, 13.

35) テキストとしては、Migne, *Patrologia Latina*, 39, 1569 所収のものを用了が、わかりやすいように適当に段落をもうけた。